

浄土を求めさせたもの — 『大無量寿経』を読む—

第 114 回 (2018.8.20) の要旨

拝読文(『真宗聖典』60～61 頁)

窈窈冥冥として別離久しく長し。道路同じからずして会い見ること期なし。甚だ難し、甚だ難し。また相値うことを得んや。何ぞ衆事を棄てざらん。おのおの強健の時に曼んで努力修善を勤めて精進して度世を願え。極めて長生を得べし。如何ぞ道を求めざらん。安所ぞ待つべき。何の楽しみをか欲わんや。かくのごとく世人、善を作して善を得、道を為して道を得ることを信ぜず。人、死して更りて生まれ、恵施して福を得ることを信ぜず。善悪の事、すべてこれを信ぜず。これを然らずと謂えり。終に是することあることなし。但これを坐するゆえに、且つ自らこれを見れば、かわるがわる相瞻視して先後同じく然なり。転た相承受するに、父、教令を余す。先人・祖父素より善を為さず。道徳を識らず。身愚かに神闇く、心塞り意閉じて、死生の趣、善悪の道、自ら見ること能わず。語る者あることなし。吉凶禍福、競いておのおのこれを作す。一も怪しむものなきなり。生死の常の道、転た相嗣ぎ立つ。あるいは父は子を哭し、あるいは子、父を哭す。兄弟・夫婦、かわるがわる相哭泣す。顛倒上下して無常の根本なり。みな過去に当く。常に保つべからず。教語開導すれどもこれを信ずる者は少なし。ここをもって生死流転し、休止することあることなし。かくのごときの人、矇冥抵突して経法を信ぜず。心に遠き慮りなし。おのおの意を快くせんと欲えり。愛欲に痴惑せられて道徳を達らず。瞋怒に迷没して財色を貪狼す。

「窈窈冥冥として別離久しく長し」と。「窈」というのは、かすかであると。微細の微と言いましょうか。そして「冥」は暗いという意味です。光が入らないと言いますか、そういうような状態でほとんど眼の働きが役に立たないような在り方。この字を重ねることによって、我々が過去のこと、未来のことを見通そうとする時に、ほとんど分からない。清沢満之の言葉に、生まれる前、生はいずこより来たるという言葉がありますけれど、生まれる前がどうであったのか、そして今ここにあることが一体どうなっていくのか。もし命が終わっていくなら、その先はどうなるのか。そういうことについて我々はほとんど見る事ができない。そういう在り方の中で、「別離久しく長し」と。人と人との間柄は、ちょっと現在だけ親しくしていたり、あるいは過去からずっと一緒に生きて来たというような感覚がある。そういう中に亡くなっていった場合には、どこへ行ったのか分からない。例えば愛する人を亡くした場合などに、残された者の感ずる時間は分かれてからの時間がとても長い、そういう感覚があるのだろうと思うのです。

そして、「道路同じからずして会い見ること期なし」。一緒に生きているように見えるけれども、隣を歩いているように見えても、違う道を歩いていると。だから「会い見ること期なし」。いつになったら会えるか、なかなかそういう会い見るときはない。「甚だ難し、甚だ難し。また相値うことを得んや」と。この「また」は「復」で、たとえ値ったとしても、もう一度値うことはほとんどできない。

私どもはこうして生きているけれど、生きていることの意味を求めたり、何か生きている中に喜びを求めたりする。生きることに本当の喜び、本当に自分で自分に納得できるようなものに出会うということはどういうことなのかと。こういう時に、やはり我々が求めるのは、本当に生きた人が居たら、その人に遇いたい。そういう要求を与えられて我々は生きているのでは

ないかと思うのです。例えば英雄伝とか、偉人伝とか、そういう形の、何か人間のモデルを語る物語があって、それが我々を引き込んで「ああ、こういうふう生きてみたいな」と思わせる。つまり生きるということに、何か人間は、本当に生きることを教えてくれる生き様をする人を求めているのだと思うのです。私もそうした不思議な思いをもったのですけれど、いつもつねにそういうものを求めてみたけれども、何か本当にそういう人が居るのだろうかと思って青年期に求めたけれども、何かそれが見えない。本当に生きるということを生きている人が見えない。そういう思いがあって、結局、仏陀というような理想像がもしあって、それを本当に求めて生きている人が居るならという思いで京都へ行った。今頃になって、ああ、そういう要求があって行ったのかなと思うのです。そして出遇うことができた。出遇うことができたその人は、実は、本当に仏道を求めて生きた人を求めた人であった。その人がまた先に求めた人をモデルとして生きようとして、それがまた次々に人を呼び寄せて人を生みだして来る。

日本の仏教は祖師仏教だと言うのです。祖師というのは、自分に先だって釈迦如来の生き様を求めた先輩方、インドであったり、中国であったり、日本だったり、その先輩方の生き様をモデルにして生きようという意欲が求めさせる。そしてそういうふう求めて行く時に、それは結局、人を求めるように見えるけれど、人ではなくて、人を生かしている真理性、ダルマと言われる法があって、その法を求めて法を生きようとする。それはつまり、本当の命を与えてくれるものを求める。そういうことが人間として生きるということには何か常に与えられているのかなと思うのです。

人間を超えたものがある、それを信ずる。けれども、実際は、例えばキリスト教だったらイエスという人が現れて、そのイエス像をモデルにして教学ができる。教学ができるけれどもそのイエス像を求める。そういうことが生きたキリスト教を常に新しく生かしている。仏教であればシッダールタ太子が苦悩して求めたそのすがたを求める。そして仏陀自身が人に依るなど。わしを求めてわしがあるのではないと。わしが生きようとした法がある。その法を生きよと、こう遺言したと言われている。しかしその法、ダルマを求めると言うけれど、ダルマそのものは、そのようなものがどこかにあるのではなくて、やはりそのダルマと称される真理性を信じてそれを生きた人、その生きた人を通して、人それぞれが違う命を与えられるのだけれども、違う命の中に本当の命を感じずるものを求めて歩む。そういうことが常に新しく私たちの命に、本当にこの窈窈冥冥として何も見えない命を生きているにもかかわらず、何かそういう命を共に生きている中に、真理を求めて歩んだ人が灯火のように現れて、後から行くものはそういうものとの出遇いを深く求めて歩んでゆく。こういうことが説得力をもって教えとなり経典ともなり、そして新しく人を生みだして来るのが起るのでないかと思うのです。『無量寿経』のこの段に入ってから文章は、この世の在り方を、本当に人間が迷い苦しむ、そして苦悩の命を増幅していくことを描いているけれども、その中に何か求めざるを得ないのだということを教えようとしている。こういうことが伺われます。

ですから、「何ぞ衆事を棄てざらん」と。自分という命があるところには、生きていくために様々な生きるための仕事が与えられるわけです。生きているということは、与えられる諸状況があってそれとの関わりで生きているわけですから、関わりの中に、それぞれ、その日の日暮らしを務めなければならない。それに関わり果ててしまう。「衆事」、諸々の事、諸々の出来事と言ってもいいし、諸々の仕事と言ってもいいわけですが、本当は見えていない状況であるにもかかわらず、今差し当たって取り巻いている状況に興味があって、そこに我々は引き込まれてしまう。人間がこの世を生きている時には、何を生きているか分からないけれど、とにかくその場で興味を引かれるものに夢中になってしまう。そういうことが「衆事」という言葉で言われてくるのでしょう。その衆事が移ろっていつてしまう。そのことがずっとあるわけで

ない。だから前の情報を与えられてもあまり興味がないのですね。今起こっている事柄が興味を引くわけです。そしてその結果がどうだったかとか、そういうことが常に起こっている。命が生きているということは、状況と共に生きていますから、その状況に埋没して状況によって動かされて生きてしまう。そういう在り方が「窈窈冥冥」という在り方になっているわけです。結局、何を生きて来たのか分からない。これから先もどうなっていくのか分からない。そういう在り方に対して、「何ぞ衆事を棄てざらん」。なんでそういう在り方を脱出しようと思わないのかと。こういう呼びかけです。

こういうふう呼びかけられて、何となくちょっとはそういうことは気にはかかるけれども、取り巻いている衆事の方が強いわけで、だからそれを離すことができないわけです、我々は。離すことができるように思って、例えば家を出る。出家というような精神は、そういう世間關心を棄てるために家を出ると言うのですけれど、家を出たからといって生きることを取り巻いている諸々の事柄をすべて棄てるなどということとはできない。ですから、差し当たって相対的にそれまで引きずられていたような在り方から脱出するということと止まるしかない。まあ、せめてせいぜいそのぐらいですね。生きるということは必ず状況との関わり合いを生きるわけですから、そういう関わり方自身を切ることはできないのです。そういうやっかいな問題がある。けれどもともかく人間を迷わせるような様々な事、そういう事を本当に脱出してみないかという呼びかけです。

そして「努力修善を勤めて精進して度世を願え」と。「度世」というのは世間を超える、単に世間の中に埋没するのではなく、世間を渡っていく。渡るというのだけれど、度という字は渡る方向がいわゆる世渡りという渡り方ではなくて、そういう渡り方をどこかで破るようなことを度という字で表すわけです。仏教が呼びかけるときには、やはり生きるということの中に本当に生きるという方向を呼びかける。俗事に巻き込まれるという言い方があるけれども、世間生活に埋没してしまう在り方から、ある意味で本当の命を求めようという方向に生きると。こういう方向を示すために、この「度」という字を使うのだらうと思うのです。度世、世を度ると言うけれど、世を超えて世を渡る。

そして、「極長生を得べし」と。ここでまた長生きという言葉が出ています。世俗に引き込まれた場合には短命になるけれど、それを超えたら長生きできる、そういうイメージですけれども、そういうことを誘いとして本当の命を生きることへ誘っているわけです。この世の在り方を転換して、新しい命、あるいは本当の命、あるいは仏教が与える真実の生命と言いますか、そういう宗教的生命、そういう命を生きることができると、長生きができるというふうに誘うわけです。だから、文字通り長生きできるのではない。文字通りとっては変だけれど、この世の迷いの命が長引いて何のためになるのか。曇鸞大師が長生不死の方法だということで仙經に迷ったということがありますが、そういう意味でこの世の命、迷いの命を長引かせたいというのであったら、世渡りを長く続けたいという話だから、そういう意味ではない。

親鸞聖人は「長生不死の神方」という言葉を「信巻」の一番初めに出してきます。だから信心を持つということは、本当の命を持つということなのだ。本当の命、真実の生命を与えられたということは長生不死の方法が与えられることなのだ。こういうふうに使って直しておられる。長生とは、本当の命と言っても本当の出遇いをもつことと言ってもいいわけです。本当の出遇いはなかなか難しいことですが、それに出遇うということが長生、「ああ、本当の命だったのだ」と、そういう喜びを与えて来る。そういうことを、「如何ぞ道を求めざらん」。そういう在り方を本当に求めなければならない、だからどうして道を求めないということがあり得ようかと。

そして「何の楽しみをか欲わんや」。楽しみを求めるといっても、それは何についてもそ

うなのですけれど、人間は興味が引かれてそれが楽しいとなると、それに突っ込んでいく。けれども突っ込んでいけばいくほど離れがたくなって、そしてそれが圧倒的に時間を縛ってしまう。そうすると普通に何でもなく日常に生きている方が楽しくなってきた、もうやめたというように戻ってくる。なかなかやっかいなことです。だから何の楽しみを欲求するのだと。

「道楽」とはよく言ったもので、道を楽しむと言うけれど、道と言えるようなものなのかということ。我々を引き込むものは、それぞれの宿業因縁で与えられた条件の中で、何かある意味での楽しみがあるけれども、それが本当に人生を満たす、本当にそれで満足成就するほどの喜びなのかというと、なかなか中途半端になってしまうとことが多いのではないかと思うのです。本当の楽しみと言えるようなものはなかなか与えられない。まあ、ほどほどしかないのだろうと思うのですけれども、そういう在り方でこの世を生きて終わって行ってしまふ。それは一番初めに出ていましたように、人それぞれに道が違って、それぞれに違う道でしかない。だから出遇いが無い。そういう在り方しかないのかなと思うのですけれども、本当の楽しみとは何だろうか。どんなことが本当の楽しみかと考えることが哲学だと言われることがあって、だから真・善・美などと言われて、本当に楽しいことが本当の真実だと。それが本当に人間を満足させる美しさでもある。そういうことが重なることがあり得るか、そのようなことが課題になるわけです。

結局そうすると、人間が自分独りでその道を探してその道を獲得できるということは容易ではない。だから、自分に先立ってそれを求めた人たちが、これこそが本当に出遇った喜びなのだとすることを語ってくれる。ここに人間の歴史、出遇いの歴史が生まれて、それを我々は求めて出遇えるかどうかということになるのだろうと思うのです。そういうふうには本当に一人ひとりが、自分としては自分の人生をこういう形で生きてみたいと思いつつながら、なかなか本当の命には出遭えない。何かそういう悲しみが、ずっと人生を覆っているところがあると思うのです。

そして、ここでいったん段落が変わって、「かくのごとく世人、善を作して善を得、道を為して道を得ることを信ぜず」と。その後、「死生の趣、善悪の道、自ら見ることを能わず」。死生の趣ということは、つまりどこに向かって生きるのか。死生の向かうところ、生活がどこに向かうのか。善とか悪とかがどういうふうにならっていくのか。こういうことについて、「自ら見ることを能わず。語る者あることなし。吉凶禍福、競いておのおのこれを作す。一も怪しむものなきなり」。吉凶禍福に迷わされる。我々の生活の命の在り方自身が見えていませんから、喜びが与えられれば吉だと、苦しみが与えられれば凶だと感ずる。凡夫は禍福の思いを神頼みにするわけです。結局、我々の精神の本当の在り方が見えていませんから、どうしても世人、世間を生きる人は、自分の在り方自身の成り立ち、そして行く末、そういうことがちゃんと分かっているから、与えられてくるものが吉凶禍福として与えられてくる。おみくじだとか占いだとか、そういうのに迷わされて、それを憑めばなんとかなると信じてしまう。そういうのがこの世の中の神頼みなのでしょう。結局、本当に見えてないということなのです。

以下、この段は、とにかく我々の在り方をこれでもかというほどに言葉を変え、品を変えて、自覚できないでうろついている我々の在り方に対して、仏陀が慈悲をもって、あなたの在り方はこうなのだよと気づかせるべく語ってきているわけです。何か理性をもって賢く生きているように見えるけれども、本質はこういうことなのだよと。それが見えてないのだよと。耳の痛い話ですけれども、そういう命であってよいのか、そういう命から本当に脱出しなければいけないのだよと呼びかけている。でも脱出しなければと言われてたら、そうかなと思う程度であって、なかなか我々はこういう世俗の在り方から本当に足を抜こうなどとは思わない。だから徹底的に教えて来るわけです。そういう在り方を教えんがための言葉だということ。す。

文責：越部良一（親鸞仏教センター嘱託研究員）